

第2回 JOMF 特別企画セミナー 大阪開催のご報告 (記事スタイル)

4月22日、大阪商工会議所において、『海外赴任者のご家族を送り出す皆様へのメッセージ』のメインテーマのもと、日本と中国からの講師をお招きし、第2回 JOMF 特別企画セミナーが開催されました。これに関して、前回3月4日の東京開催と同様に、記者インタビューのスタイルで現場ルポ風に纏めてみました。



開会のご挨拶をする
倉林専務理事

—大阪で特別セミナーを企画した背景は？

A: JOMF では、これまで、毎年秋に海外医療情報交換会と題して大規模な形の情報発信の場を設けてまいりました。当初は、JOMF の拠点診療所(大連・シンガポール・マニラ・ジャカルタ等)に派遣されている医師による現地医療事情や医療情報の交換会が主で、開催地も拠点のある海外都市であったりしましたが、その後、会員企業にも是非この種の情報に触れてもらおうということで、東京で開催することになり、著名な医療関係者や企業の海外安全対策部門の方を講師に招き、各年度のトピックとなる感染症対策や実際の企業の対応等についてお話を頂いていました。

が、情報交換会は年一度、それも東京だけでしか開催されないのですが、昨今の経済状況や企業の経営状況から参加を辞退される会員もおおくなっています。我々が会員企業との懇談をする中、複数の会員企業の皆さまから、『小規模でもよいので、タイムリーな話題のセミナーを数多く開催してほしい』、『東京だけではなく、地方でも開催してほしい』等のご要望が多くあった為、弊基金で検討の結果、2009年度は試験的に東京・大阪で試験的に開催をし、皆様からの意見も取り入れて10年度(計6回を計画中)以降のセミナー活動計画立案の参考にしたかったからです。今回は、その実施第一弾となります。

—JOMF の海外医療情報交換会とミニセミナーの関係は？

A: 情報交換会は大規模な形で行われるのでやや一方的になります。一方、ミニセミナーは、年に数度、いくつかのテーマを設定し、東京以外の会場でも実施することとし、講師と参加者の距離を短くし、Q&Aや意見交流などもフランクな形でできるようにしたいと考えています。たとえばセミナー後に、講師を囲んで車座形式の一層フランクな『場』を設定したり、コーヒーや紅茶等を飲んだりしながら、講師と歓談する中で、日ごろの自分たちの思いや講師のプレゼン内容への疑問点・意見などを交換し合うことで、より心にストンと落ちる、つまり納得がしやすい、形になるようなものを目指しています。

—講師やテーマの選定方法は？

A: 今回は、実施前準備期間が短かったこともあり、また、初めてということもあったので、事務局が決め打ちで決めてしまいました(笑)。実は、昨秋開催された情報交換会の際に、以前 JOMF のニューズレターを執筆頂いていた転勤妻(Tentsuma)の大向さんから、『企業から人が出る場合、案外そのご家族、特に奥様のケアが足りていないということを感じる』と伺い、「企業は社員を出してしまえばそれで終わりじゃない、奥様のことも含めて、赴任から帰任までちゃんとケアしないといけないのだな」と思って、外務省のメンタル専門家や産業医経験者の方等から意見を拝聴したところ、『赴任までにきちんと前処理をすれば、実際に赴任をしてからのトラブルも減らすことができます。現地でメンタルな問題が発生してしまうとこの処理にお金も出て行ってしまうことになるので、無駄な出費を防げるのですよ。』といったご意見ももらえたので、今回、メインテーマを『海外赴任者のご家族を送り出す皆様へのメッセージ』とし、講演題目は、『忘れていませんか？妻たちのフォロー』と『駐在員の医療費負担の在り方について(中国の例をもとに)』としました。

今後は、会員企業からの声も聞きながら、決定していきたいと考えていますし、セミナーの形態の検討や会員企業向けの出前セミナー等も視野に入れて活動を展開したいと考えています。もっとも、会員企業向け個別セミナーの場合には、ある程度の参加者を企業側に集めてもらわねばなりません。

—セミナー当日の参加者は？

A: 合計20名の方が参加されました。元々参加ご予約の方1名は急用で駄目になったのですが、欠席のご連絡も戴いています。また、東京から大阪まで態々お運びいただいた方もいらっしゃる、事務局としても大変に身の引き締まる思いでした。また、通常のセミナーと比して参加者の皆さまの集合がとても速く、ダラダラとならなかつたのも印象的でした。人数的にはこの人数を頭とし、これ以下のアットホームなというか、塾のような雰囲気キープしていきたいと考えています。

—大向さんのピンチヒッターをされましたが、如何でしたか？

A: セミナーの直前に、「大向さんが入院されたので大阪に行けない」との連絡が入り、少し慌てましたが、東京セミナーで私も聴講していたこと、また、セミナー後に反省会を開き大向さんと一緒に、「大阪ではここをもう少し強調しよう、こう表現しよう」といった事前打ち合わせがあった為に、入手した資料もその内容になっていましたので、大向さんが何を話し、何にポイントを置かれようとしていたのかについて大雑把とはいえ、概ね把握できていたことが奏功しました。 まあ、変な譬えですが、『代打ホームランとは言えずとも内野安打か四球による出塁』といったところでしょうか:笑。



『一時帰国は最高の気分転換になり得る』と語る筈だった大向貴子さん (写真は東京のものです)

—大向さんの『忘れていませんか？妻たちのフォロー』の主な内容は？

A: ご自分が帯同妻として、現地赴任した経験をもとに立ち上げられた転勤妻サイトも 10歳になり、会員数も 400 名から 6,400 名へと 16 倍に増えた中、東南アジアの構成比が半数を超えたといった会員分析や、実際問題の書込み開始から解決に至るまでの会員相互による書込み内容の紹介などと絡めたストーリー展開で、「困った時には一時帰国も一案よ」といった大向さんご自身の経験等も披露されました。

—田中先生の『駐在員の医療費負担の在り方について（中国の例をもとに）』の内容は？

A: 日本と中国、顔は似れども思考・発想方法が違う、医療や保険のシステムも全く違う、日本の常識ノットイコール中国の常識というより、日本の常識そのものが世界の中では異端なものだという田中医師が中国で歯科医師として働いている中で、感じ、あるいは確信するにいたった諸々の点について日中比較をもとに話が進みました。 その中で、「駐在者の医療費の定率給付という制度には問題があるのではないかと、特に高額な整形手術や日本では保険適用されない治療をするなど社員のモラルハザードを招きやすい。定額給付にすればそういう無駄な出費が抑えられるので、企業はこの際、制度の変更の検討など開始するべきではないか」という提案があり、アンケートをみても『新たな着眼で、面白い!』といった感想が複数あったことが鮮明に記憶に残っています。



中国の実情について、興味深い話を展開する田中健一先生

—アンケートの活用についてはどう考えている？

A: ISO ではありませんが、効果分析は必要だと考えています。東京セミナーのアンケート分析結果に基づいて、参加者の傾向、期待と実際の乖離の有無、気づきはあったのか、今後どんなセミナーを希望されているのかといったことを十分に検討し、今後のセミナー運営への反映をしてゆきたいと考えています。 また、日ごろご協力戴いている『渡航医学センター』との共同アンケートも実施し、相互に「よりベターなもの」を目指してゆきたいと思っています。参加者から『参加して楽しい、楽しくって役に立つね』と言ってもらえるセミナーをこれからも企画実施してゆきたいものだと思っています。



転勤妻効果なのか、女性が参加者の 6 割を占めました。が、大向講師の突然のご入院により、JOMF 宮本が代打で講演するも、冷や汗たらたら。(写真左)

田中先生のお話真剣に聞き入る参加者の皆さん。(写真右)



講演後の意見交換のために、聴講者と講師との距離を近づけるために、商工会議所に無理をいって三重の V 字型に机をアレンジ (下段左・右)

参加者の質問に答える田中先生 (下段中央)

